

164. 昭和63年度滋賀県下における発掘調査の紹介

その2

ここに、「滋賀文化財だよりNo133」に引き続き、去る平成元年3月4日(土)に行なわれましたスライド発表、下半期の内容を紹介いたします。

5. 山の神遺跡でさらに窯跡一基検出

大津市一里山 山の神遺跡

山の神遺跡は、大津市一里山三丁目に所在しており、古くから須恵器の出土する遺跡として知られていた。

昭和55年から昭和59年にかけて、遺跡の内容を明らかにするための発掘調査が実施され、窯跡2基と掘立柱建物跡6棟が検出され、窯跡と工房跡が一体となつて発見された全国的にも珍しい遺跡であるということが明らかにされている。

調査は、京滋バイパスの進入路建設に伴い実施されたものであり、調査地点は、前回の調査で灰原であることが明らかにされていた地点である。

調査の結果、新たに窯跡1基と灰原の広がりを確認した。



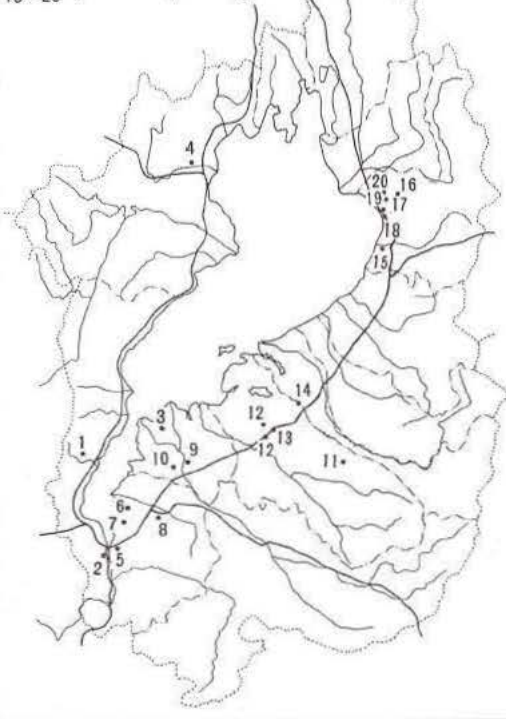
第3号窯

窯跡は、排水管理設のため焼成室から煙道が掘削されており、焚口から焼成室にかけて約3.0mが残っていたにすぎなかった。

しかしながら、この窯跡は、天井が残り地下式のあな窯で最終時の床面が幅約1.3m、高さ約0.8mであったことが判った。

さらに、この

1~4遺跡	文化財だより133
	(本文)
5~12 "	" 136
13~20 "	" 137



遺跡位置図(位置図の番号は本文と同じです)

窯は、地中を断面円形に掘っており、創業時においては、高さが約1.0mで、二度の床面の貼替えがあり、合計三次の床面があることも判明した。

灰原は、最も厚みのある部分で3.2mあり、灰及び粘土の堆積状況から概ね上・中・下の三層に分けることができた。

各層から杯身・蓋を初めとして大量の須恵器が出土しており、その総量は、コンテナパット約千箱であった。

これらの土器の中で、注目されるのは、円面碗が多数出土したことで、大小とりまぜて10点以上あった。

また、この他に陶棺片も20点近く出土した。

これらの遺物から、この山の神遺跡は、7世紀前半の中頃から後半にかけて操業していたことが判った。

(大津市教育委員会 須崎 雪博)

6. 草津市南西部地域における古墳の一形態

草津市御倉町 襖遺跡

草津市御倉町地先に所在する襖遺跡は、弥生時代から近世にかけての集落跡である。

今回の調査は、草津川改修事業の事前調査として河川法線内の暫々定部6,050㎡を対象に行ない、方形周溝墓、古墳、竪穴式住居、井戸跡等の遺構を検出した。

しかしながら、当該地は近世期の水田開発により相当削平を受けており、遺構・遺物の遺存状況は良好とはいえず、各遺構の年代についても不明なものが多い。

今回検出した遺構のうちS×6と呼んでいる古墳も既に墳丘を消失しており巾0.7~1.1mの周溝が残るのみであったが、一辺10m前後の小型の方墳と考えられる。周溝内からは墓前祭祀と思われる土器群が出土しており、これらの土器から当該墳は6世紀初頭頃の築造と推定される。

襖遺跡周辺には、大宮若松神社古墳、五条古墳群、南山田古墳群、鞭崎神社古墳群等が現存する古墳(群)として知られているが、今回の墳丘消失古墳の検出は、草津市域における古墳時代の社会構造等を考察するうえで極めて貴重な発見といえる。

(草津市教育委員会 小宮 猛幸)



遺構完掘状況(西から)

7. 南笠古墳群周濠確認調査

草津市南笠町 南笠古墳群

南笠古墳群は、草津市南笠町宇風呂海道に所在する古墳群で、現在前方後円墳2基と円墳1基が残存するが、文政4(1821)年に編纂された「栗太志」には、かつて22基の古墳が存在したことが記されている。

現存する前方後円墳のうち、北側に所在する1号墳の規模は、全長27.5m、後円部径18.5m、前方部幅16mで、南側の2号墳は、全長30m、後円部径21m、前方部幅15.5mを測る。これらの古墳には、かつて周濠が巡っていたと考えられるが、現在では痕跡も認めら

れないため、今回試掘調査を実施することとなった。

調査は、両古墳の周辺に15か所のトレンチを設定し実施した。このうち1号墳北西側のくびれ部付近に設定したトレンチより、最大幅6.0m、深さ40cmの周濠を検出した。そこで、前方部側へ拡張したところ、周濠は徐々に浅くなり、前方部端までは延びなかった。なお、当トレンチ内の墳丘裾部より、形象埴輪の破片が出土し、周濠内からも円筒埴輪の破片が若干出土した。

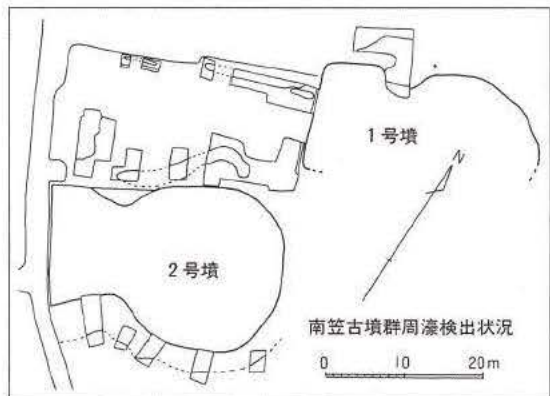
また、前方部前面に設定した2か所のトレンチでは、墳丘際より周濠の外側の肩および南東隅を検出し、本来の前方部が、現状より小規模であることが判明した。

次に2号墳北西側に設定したトレンチからは、墳丘の形状に合わせて屈曲する周濠を検出したが、残存する深さが最大でも15cmと浅く、墳丘全体に巡って行かないため、かなり後世の削平を受けていることが推測された。検出された周濠の中央部より、多数の円筒埴輪片が出土した。

2号墳南東側に設定した5か所のトレンチからは、いずれも墳丘の形状に合わせて巡る周濠を検出したが、どのトレンチでも墳丘裾部を検出できず、本来の墳丘端は、現状より内側に存在したことが判明した。

以上の調査の結果、1号墳、2号墳とも、現存する墳丘は本来の形状を留めているものではなく、後世の崩壊、盛土、削平等によって、かなり変容していることがうかがえた。来年度以降も試掘調査を継続する予定なので、南笠古墳の実態が徐々に解明されることと思われる。

(草津市教育委員会 藤居 朗)



周濠検出状況

8. 古墳後期~鎌倉時代の集落跡を検出 栗東町御園 中村遺跡

中村遺跡は、平安から鎌倉時代を中心とする集落であることが、過去の調査で確認されている。

調査は団体営は場整備事業に伴うもので、昭和63年4月から実施している。遺跡の存在する中村・上砥山



調査風景

周辺は、釜勝川の影響で堤防から50mぐらいまでは、ほとんど遺構が検出されず、ところどころに残っている島状の高いところと、現在集落が存在するところに古くから人が住んでいたことが考えられる。

今回確認された遺構は、古墳時代後期から鎌倉時代を中心とするもので、竪穴式住居、掘立柱建物、土墳墓、井戸、旧河道、溝などがある。掘立柱建物は、10棟以上確認され、12～13世紀頃のものが多いが、柱穴の掘形が1m前後で、径約25cmの柱痕をもつ2間×3間(3.2m×6.8m)の8世紀後半頃ではないかと思われる建物が確認されている。12～13世紀頃の建物が、上砥山周辺の条里方向と一致するのに対し、この建物は、下戸山周辺の条里の方向と一致する。また、少し離れて同時期と考えられる幅約1.5mほどの溝が巡っており、建物のまわりを区画している可能性もある。この他、12～13世紀の時期で、井戸、土墳墓、掘立柱建物がまとまって検出された地区があり、なかでも土墳墓は、木棺の痕跡が一部残っており、その下には四方に約50cmほどの板石を埋めて木棺の台にしていた。頭があったと考えられる方向には、白磁碗、土師皿、瓦器碗が並べられ、白磁碗の下に刀子が置かれていた。

中村遺跡では、現段階で古墳時代の遺構は一部で少ししか確認されていないが、北側の丘陵に存在する龍王古墳らを造成した人たちの集落が確認される可能性を残している。また、旧河道では墨書土器が出土していることと、前述した奈良時代の建物の関係も含めて今後の調査・研究に期待がかかる。

(栗東町文化体育振興事業団 近藤 広)

9. 第4次調査出土の琴状木製品

野洲町大字市三宅 市三宅東遺跡

市三宅東遺跡は縄文時代中期から中世までの集落跡として知られている。調査区は、第1次調査の南西に接している。

検出遺構は弥生時代中期の落ち込み、古墳時代中期

(5世紀代)の竪穴住居址、大溝、(6世紀代)の溝、掘立柱建物、中世の溝、掘立柱建物を検出した。

今回の調査で特に注目されるのは大溝から初期須恵器甕を初めとして5世紀前半の多量の土器が出土し、また多量の木製品が出土している。木製品には、弓、斧柄、鋤柄、建築部材と考えられる板、角材とともに琴状木製品が発見された。

琴状木製品は、琴板のみで縦方向に半分だけ出土した。残在状況での規模は、全長161.3cm、琴尾幅11.9cm、琴頭幅13.8cm、厚さ1.3cmである。絃を掛ける突起は、3つ残っており側縁部を切り込んで造り出している。突起の長さは3.7cm、幅2.7cmで突起間の幅は2.0cmである。共鳴槽を取り付けるためのホゾ穴が4ヶ所穿たれており、琴尾のホゾ穴には共鳴側のホゾが残っていた。側縁部はゆるやかに曲線を描いており琴頭がバチ形に広がっている。

次にこの琴状木製品を復元してみると絃を掛ける突起は、服部遺跡、岡山県釜田遺跡の例から6つと考えられる。このことから琴尾の幅約25cm、琴頭の幅約31cmと考えられ、逆台形の刳抜き式共鳴槽が取り付けられていたと推定される。

(野洲町教育委員会 杉本 源造)

10. 野洲町野洲川左岸遺跡の昭和63年度調査

野洲町大字野洲 野洲川左岸遺跡

野洲川左岸遺跡の調査は、本年度は5ヶ所で実施された。まず、昭和59年から継続的に実施されている宇永ラキ周辺地区では本年度も二ヶ所で調査が実施された。このうち宇永ラキ1541番地の調査では、敷地面積のうち約4200㎡が調査された。調査の結果、先年度調査古墳時代竪穴住居群に西接する南北方向の旧河道や溝群、同じく自然地形に沿って南北流する奈良時代～平安時代の旧河道や条里溝、この旧河道を挟んで西側で検出された古墳時代の方形周溝墓1基などがみつかった。特に本調査地周辺の過去調査対象面積は50,000㎡を超えており、これまでの調査成果より集落、墓域、旧河道などからなる広範囲な旧況が復原可能となった。それによると旧地形は基本的に南北流する旧河道や大溝に規制され、これらの河道を境に集落、墓域、耕作地が区画されており、その幅は20m～50m程度で必然的に南北に長く占地される。特に昭和62年度に検出された古墳時代の竪穴住居は、東西50m南北100mにわたって10棟前後が重複なく配置されており、古墳時代の開発村の基礎単位を示すものと推定された。なお、この住居群に対応する墓域(方形周溝墓群)は、西側約80m前後に形成されている。他の調査地についても簡単に触れておく。まず、宇十八田では布留期古段階の竪穴住居が1棟検出され、住居の覆土からは石鋼が1

点出土した。また、県道に面した字芦田地区では、以前より検出されていた弥生時代の環濠の続きに相当する大溝や方形周溝状遺構などが検出された。同じく県道に面して北側に位置する字八反田調査地では、比較的残存状態の良い弥生時代末頃の方形周溝墓5基、古墳時代の円墳、道路状遺構などが検出された。以上5件の調査地について、とりあえず概略のみを紹介させていただいた。

(野洲町教育委員会 森 隆)

11. 「田司家」等の墨書土器出土

蒲生町大塚 杉ノ木遺跡

当該遺跡は、蒲生郡蒲生町市子川原、市子松井、田井、大塚周辺に広がる縄文時代～近世にかけての集落跡で、日野川とその支流である佐久良川によって形成された沖積低地上に位置する。

調査は、国営日野川農業水利事業、県営ほ場整備事業、県営かんがい排水事業等に伴い行なったもので、調査面積は約8200㎡である。検出した主な遺構は、弥生～古墳時代の竪穴住居3棟以上、溝跡、土壇、河跡、奈良～平安時代の掘立柱建物、溝跡、河跡などである。出土した遺物も多く、前期～中期と思われる弥生式土器、土師器、須恵器、緑釉陶器などの他、石鏃、石斧などの石製品、弓、曲物、舟形木器などの木製品等である。なかでも町内最古と見られる縄文時代晩期のカメ数個体を一括して検出したのをはじめ、8世紀後半の須恵器に「田井」、「田司家」、「東田」などの墨書土器、ピットから検出された緑釉陶器の水甕など町内で初見されるものも検出した。

また、検出した墨書土器と関連して、昭和62年度に県営ほ場整備事業に伴い行なった調査で出土した木製琴が思い出され、調査地周辺に役所的な役割をもつ館もしくは、大塚、田井周辺を含む地域（広義でいうと「麻生荘」）をおさめていた地方役人の館が存在する可能性がある。

(蒲生町教育委員会 斉藤 博史)



縄文土器出土状況

12. 奈良時代～室町時代の複合遺跡

近江八幡市 後川・上下遺跡

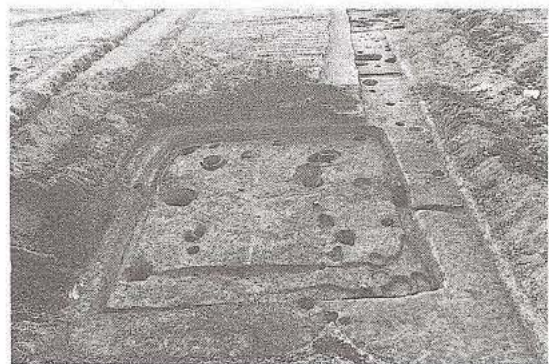
昭和63年度県営ほ場整備事業に伴い実施された発掘調査であり、近江八幡市域の北東部、安土町との境界周辺に位置する高木遺跡・後川遺跡・金剛寺遺跡・大手前遺跡・上下遺跡を縦断する結果となった。いずれも奈良時代～鎌倉時代を中心とする複合遺跡であるが、ここでは、これまで不明瞭であった後川遺跡・上下遺跡について概要を記す。

後川遺跡は、長田町を中心とする遺跡であり、高木遺跡とは沼沢地、金剛寺遺跡とは河道によって区別される。従来から中世の遺物散布地として周知されていたが、今回新たに、布留式併行期（須恵器共伴せず）と8世紀前半期の竪穴住居、15世紀～16世紀の土壇・溝・土壇等が検出された。

上下遺跡における調査対象地は、大手前遺跡と上下遺跡との中間に位置し、遺跡分布図の空白部分にあっていたが、8世紀前半期の竪穴住居、9世紀代の蒲生郡統一一条里に伴う溝、11世紀～14世紀の掘立柱建物・溝・土壇等が検出された。

両遺跡の調査からは共通の課題がいくつかあげられる。まず、竪穴住居の消長時期に関する集落構造の問題である。当地域は、7世紀後半には掘立柱建物を主体とする地域と、8世紀においても竪穴住居を主体とする地域との境界にあたり、地域性を考える上で示唆的である。条里関連溝については、復元条里との整合作業と同時に、愛知郡条里との境界部分の追求が求められる。最後に、豊織期の遺構は近年増加の傾向にあるが、明瞭な居館跡とその他の遺構との総体的把握が今後必要となろう。

((財)滋賀県文化財保護協会 小竹森直子)



後川遺跡・竪穴住居完掘状況（布留式併行期）